

第一章 世界の金シャチ横丁（仮称）構想の考え方

1) 背景と目的

背景（現状）

●本丸御殿の復元で注目

多くの寄付が集った本丸御殿の一部公開で脚光を浴びる名古屋城

●全国的な歴史ブーム、お城ブーム

歴史ブームなどの後押しにより、名古屋城の入城者数は堅調に推移

●リニアを契機とした新たなまちづくりへの期待の高まり

リニア開業を契機に訪れる多くのお客さまを取り込むことによる観光戦略の一つ

●入城者のもてなしの場の不足

団体客など入城者のニーズに応える場が十分ではなく、滞在時間も短い

都市魅力の一層の向上に向け、本丸御殿の復元を契機に新たな交流やにぎわいの拠点づくりを行うことで相乗効果を発揮していく

目的

名古屋城とその周辺地区を取り巻く現状を考慮し、世界の金シャチ横丁（仮称）基本構想が目指す目的を以下のように設定しました。

■本物志向で自慢のできる、交流やにぎわいの拠点づくり

■何度も訪れたくなる、新鮮さのあるおもてなしの拠点づくり

■尾張名古屋の歴史や文化の魅力を集めた観光の基点づくり

2) 名古屋の歩み

近世（安土桃山～江戸） “名古屋開府と武家文化の開花”

戦国の動乱期、名古屋を中心とした尾張の地では、信長、秀吉をはじめとする多数の武将が輩出され、城や砦が築られました。慶長 15 年（1610 年）からは、名古屋台地の北端に徳川家康により名古屋城が築かれるとともに、清須から名古屋へ町ぐるみの大移動(清須越)も行われ、碁盤割の城下が形成されました。城と城下の形成に伴い、経済が大きく発展し、様々な商品流通による都市の成長が見られました。

武士が勢力を伸ばしたこの時代には近世武家文化が花開き、大名達の住居である御殿を中心とした建築文化が形成されました。世の中が安定した江戸中期には、城下が活気に満ち、にぎわいにあふれ、祭りや技芸、食文化が発達し、現在の名古屋文化を形成する礎となりました。

近代（明治～昭和初期） “産業の発展と近代建築の幕開け”

明治・大正期は、名古屋が産業都市へと変貌を遂げた時代です。鉄道や港湾施設等の産業基盤が整備されるとともに、耕地整理や区画整理により整然とした街並みが形成されました。こうした中、中級武士の屋敷町は、新たな産業の担い手である政財界の住宅地となり、今も白壁、主税町などには、当時の面影を残す和館や洋館が融合した家々の集まる街並みが残っています。

また、市内には、昭和初期において建設された名古屋市役所本庁舎、市政資料館、名古屋市公会堂、中川運河松重閘門、三菱東京UFJ銀行名古屋ビル旧館等の建築物等が現存し、産業とともに都市の近代化が進んだことが分かります。



現代（昭和以降） “戦災復興と大規模プロジェクトの進展”

市内は、第二次世界大戦により市域の約4分の1を消失し、名古屋城天守閣や本丸御殿などの多数の文化財を失いました。戦後は、碁盤割の街区形成を踏襲する形で復興が行われ、100m道路や平和公園に代表される都市計画をはじめ、名古屋テレビ塔の建設（昭和29年）、市営地下鉄の開業（昭和32年）、名古屋城天守閣の再建（昭和34年）、東海道新幹線の開通（昭和39年）等の大規模プロジェクトが進み、現在の市の礎が作られました。

さらに近年、名古屋駅周辺では、JRセントラルタワーズ、ミッドランドスクエアなどの高層建築物が建設され、名古屋の玄関口としての魅力を高めています。



名古屋城と名古屋の歴史

年号	名古屋城での出来事	名古屋での主な出来事
慶長五年 (一六一〇)	名古屋城築城に着手 (二年後に天守閣竣工)	
慶長八年 (一六一三)		
慶長一〇年 (一六一五)	名古屋城本丸御殿が完成	
元和一年 (一六一六)	初代尾張藩主徳川義直、駿河より名古屋城に移る	
寛永一年 (一六三四)	本丸御殿の増築工事竣工	
万治三年 (一六六一)		万治の大火。これを契機に広小路を整備
享保一五年 (一七三〇)	徳川宗春、第七代藩主となる	
元治元年 (一八六四)	第十四代藩主徳川慶勝、第一次征長総督として大坂城に出陣	
慶応三年 (一八六七)	王政復古、新政府樹立	廃藩置県により名古屋県となる
明治四年 (一八七一)		市制施行、市内で電灯初点灯
明治二年 (一八八九)		
明治一二年 (一八九三)	名古屋城が名古屋離宮となる	
昭和五年 (一九三〇)	宮内省から名古屋市に名古屋城が下賜される	東山動物園・植物園開園
昭和一二 (一九三七)		
昭和二〇年 (一九四五)	戦災により名古屋城天守閣、本丸御殿焼失	
昭和一九年 (一九五四)		名古屋でテレビ放送開始、テレビ塔竣工
昭和三年 (一九五七)		地下街誕生、地下鉄開通
昭和三四 (一九五九)	名古屋城天守閣の再建工事が完了	
昭和五九年 (一九八四)	金鯱を天守閣から降ろす (名古屋城博)	
平成元年 (一九八九)		世界デザイン博開催
平成一七年 (二〇〇五)	金鯱を天守閣から降ろす (新世紀・名古屋城博)	愛・地球博開催

3) 名古屋城とその周辺地区の位置づけ

名古屋城周辺地区には、名古屋の成り立ちに深く関わる様々な要素が点在しています。これらを名古屋城との関わりを考慮して大別すると、名古屋城の位置づけは以下のように整理することができます。

【名古屋城とその周辺地区の位置づけ】

「歴史の中で培われた伝統文化」と「新たな都市魅力」をつなぐ結節点

● 伝統産業の集積地

- 江戸時代より多くの職人達が住む地域
- 京都や江戸から、扇子・友禅などが伝播
- 明治以降、産業技術発展の原点



● 旧来の繁栄軸＋新心の繁栄軸

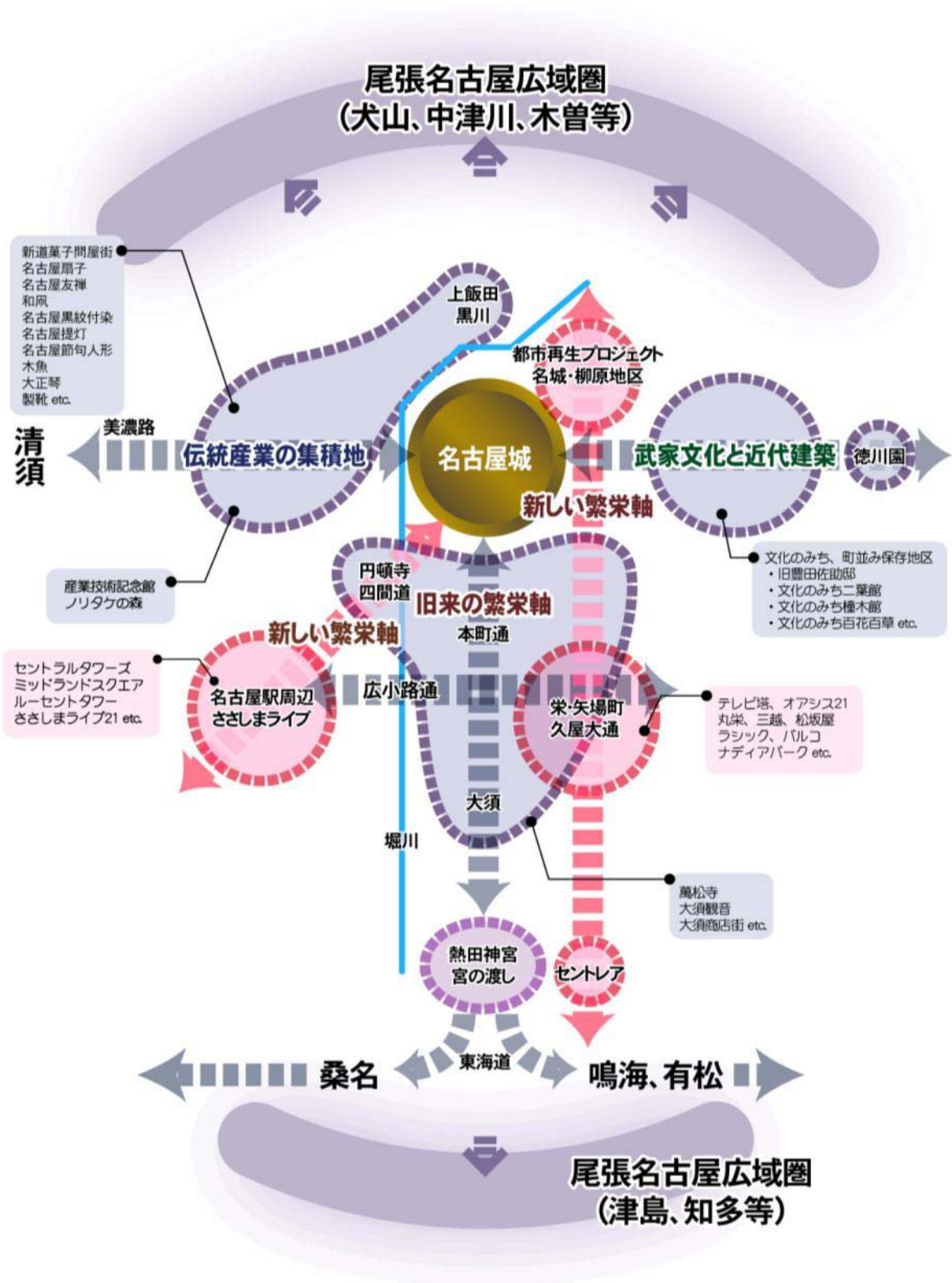
- 東海道と名古屋城を結ぶ本町通
- 江戸時代から現代まで栄える広小路通
- 栄の繁華街、名駅周辺の再開発



● 武家文化と近代建築

- 尾張藩家臣の武家屋敷
- 尾張徳川家の別邸「徳川園」
- 近代建築が建ち並ぶ「文化のみち」、町並み保存地区





4) 世界の金シャチ横丁(仮称)構想の考え方

この構想を推進するにあたっての考え方は、以下のとおりです。

